

西藏所傳・梵巴『阿含經』の諸典

寺 本 婉 雅 譯

【目次】

- 一、巴利語所傳、藏譯『轉法輪經』
- 二、梵語所傳、藏譯『轉法輪經』
- 三、梵語所傳、藏譯阿含『大空經』
- 四、西藏所傳、阿含『大集經』

巴利語所傳・藏譯『轉法輪經』

印度語 | Dharma-cakra-Pravartana-sūtra |

西藏語 | Chos-kyi hkhor-Lo Rab-Tu eSkor-Pahi-mDo |

日本語 | 法の輪を能く轉するの經

三寶に敬を以て敬禮す。

この語を我は聞けり、一時に於て、世尊は婆羅奈斯國の仙人墮處鹿野苑に住し給ひき。

(一)爾時、世尊は五比丘を呼びて告げたまへり。比丘等よ、沙門はこの二邊に住すべからず、凡そ何人も此に諸欲と、樂とを耽著するは、人種族をして低劣ならしめ、諸凡夫は無意義を有するが

故に、凡そ何人も身體の疲勞を離れ、稱讚すべからざる諸苦の無意義を有す。

比丘等よ、この諸のものは二邊の邊にして、それに入るべからず、明等覺者如來はこの中道を説き給へり。眼を作し、智を作し、寂靜を作し、明知と、如實の執持(正覺のこと)と、涅槃とに如實に入るることなり。

(二)比丘等よ、明等覺者如來の説き給へる中道とは何ぞや、眼作と、智作と、寂靜作と、明知と如實執持(正覺の意)と、涅槃とに如實に入ることなり。中道とは八支の聖道なり。かの八とは是の如し。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定これなり。この中道はまた明等覺者如來によりて説き給へり。眼作と、智作と、寂靜作と、明知と、如實執持(正覺)と、涅槃とに入ることなり。

(三)比丘等よ、是れはまた苦聖諦なり。生の苦と、老の苦と、病の苦と、死の苦と、愛せざるものに會する苦と、愛するものに離る苦と、總て欲を求めて尙それを得ざる苦となり。約せば五取蘊の苦なり。

(四)比丘等よ、是はまた苦集聖諦なり。總て愛(Sred-Pa)の集(發生)を有し、喜悅の貪欲を有し、彼と彼とを明かに喜悅す。是の如く欲の愛(Sred-Pa)と、輪廻の愛と、輪廻を離る愛となり。

(五)比丘等よ、是れはまた苦滅聖諦なり。若し是の如く、愛(原文 Srip-Pa は誤?)を殘らず(滅

し、貪欲を離れ、滅を清淨にし、別々に變(捨離)じ解脱と解脱に、臆病もなし。

(六)比丘等よ、是はまた苦滅に到る道の聖諦なり。是はまた八支の聖道なり。是の如く、正見、正思惟、正語、正業の邊、正命、正精進、正念、正定となり。

(七)比丘等よ、是は苦聖道なり。前に聞かざりし法に於て、眼を發起し(Mig-h-Skyed-Pa)、智(Ye-Ces)を發起し、慧(Ces-Rab)を發起し、明(Rig-Pa)を發起し、光(Snari-Ba)を發起せり。

是はまた苦の聖諦なり。比丘等よ、是を悉く知るべし。前に聞ざりし法に於て、眼を發起し、智を發起し、慧を發起し、明を發起し、光を發起せり。

(八)是はまた苦集聖諦なり。能く斷すべきなり。比丘等よ、是は前に聞かざりし法に於て眼を發起し智を發起し、慧を發起し、明を發起し、光を發起せり。(以下百八五右)

(九)是は苦滅聖諦なり。比丘等よ、是は前に聞かざりし法に於て、眼を發起し、智を發起し、慧を發起し、明を發起し、光を發起せり。比丘等よ、是は前に聞かざりし法に於て、眼を發起し、智を發起し、慧を發起し、明を發起し、光を發起せり。

(十)是は苦滅に到る道の聖諦なり。修習すべきなり。比丘等よ、是は前に聞かざりし法に於て、眼を發起し、智を發起し、慧を發起し、明を發起し、光を發起せり。

(十一)比丘等よ、是の如く、この四種の説明は聖諦なり。是の如く、三度誦して十二相を云何に

轉せしかの智見は甚だ清淨なり。比丘等よ、我は離斷せり。天と俱に、世間と惡魔と俱に、梵と俱に、沙門と俱に、有情の主と、天と人と俱なる中に於て、無上正等覺は他になきなり。

(十二)比丘等よ、すべて又是は(以下百八六右)、この四聖諦を三度誦して、十二相を云何に轉せしかの智見は甚だ清淨なり。比丘等よ、應に我は世間と天と俱に、惡魔と俱に、梵と俱に、沙門と俱に有情の主と天と人と俱なる中にて、無上正等覺を明かに圓滿せる覺者となりて別々に思惟せられたり。

この智もまた我は見たり。前になかりし解脫(を得て)我は餘りなく、また(三)有を受くることなく涅槃せりと。

(十三)世尊はこの語を告げ給ひしに、五群の比丘は世尊の所説を明かに悦べり。是の如く、かの授記を此に示し給ひしとき、具壽憍陳如は塵を離れ、垢なき法の眼を生せり。凡そ僅かなる集(一切衆生)の一切法も滅の法なりと。

(十四)世尊は法輪を能く轉じ、轉じ給ふや、地(居)の諸天は稱讚の聲を叫びて(曰く)、若は沙門若は天、若は魔、若は梵は、世間に於て他の誰も尙轉じ能はざりき。是れ世尊が婆羅奈斯の仙人墮處鹿野苑に住し、無上の法輪を能く轉じ、轉じ給へり。

(十五)爾時地(居)の天聲を聞きて、四天王の諸天は聞を叫びて(曰く)。若は沙門、若は婆羅門、

若は天(以下百八五左)、若は魔、若は梵は、世間に於て、他の誰さへも、尙轉すること能はざりき。これ世尊が婆羅奈斯國の仙人墮處鹿野苑に住し、無上法輪を轉じ、轉じ給へりと。

(十六)三十三の諸天が稱讚する聲を聞きて、夜魔の諸天は稱讚の聲を叫びて(曰く)、若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵は、世間に於て他の誰もさへ尙轉する能はざりき。是れ世尊が婆羅奈斯國の仙人墮處鹿野苑に住し、無上の法輪を轉じ、轉じ給へりと。

(十七)夜魔の諸天が稱讚せる聲を聞きて、兜率の諸天は稱讚の聲を叫びて(曰く)、若は沙門、若は婆羅門、若は魔、若は梵は、世間に於て、他の何人もさへ尙轉する能はざりき。是世尊が婆羅奈斯國の仙人墮處鹿野苑に住し、無上の法輪を轉じ、轉じ給へりと。

(十八)兜率の諸天が稱讚せる聲を聞きて、化樂天の諸天は稱讚の聲を叫びて(曰く)、若は沙門、若は婆羅門、若は天(以下百八六左)、若は魔、若は梵は、世間に於て、他の誰もさへ尙轉する能はざりき。是れ世尊は婆羅奈斯國の仙人墮處鹿野苑に住し、無上の法輪を轉じ、轉じ給へりと。

(十九)化樂の諸天が稱讚せる聲を聞きて、他化自在の諸天は稱讚の聲を叫びて(曰く)、若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵は、世間に於て、他の誰さへも尙能く轉ずる能はざりき。是れ世尊が婆羅奈斯國の仙人墮處鹿野苑に住し、無上の法輪を轉じ、轉じ給へりと。

(二十)他化自在の諸天が稱讚せる聲を聞きて、梵身の諸天は稱讚の聲を叫びて(曰く)、若は沙門、

若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵は、世間に於て、他の誰もさへ尙轉ずる能はざりき。是れ世尊が婆羅奈斯國の仙人墮處鹿野苑に住し、無上の法輪を轉じ、轉じ給へりと。

(二十一)斯てくその刹那と、瞬間とに梵世界にまで音聲は遍滿せり。爰に於てまた十千(世)界は實に震動し、實に能く震動し、實に能く震動し、恐怖となり、奇異となり、光りとなり、諸の世間に於ても(また)是の如くなれり。諸の世間に於て是の如く成れり。梵は教法を開き、諸天は各々の住處へ去れり。

(二十二)その時、世尊は特に稱讚し(以下百八七右)、特に稱讚して(曰く)、一切智の故に憍陳如(Kan-dinya)なり、諸の智慧に由て憍陳如なり。この故に是れは具壽憍陳如にして、一切智憍陳如と云はるゝ名を得たり。

法の輪を轉するの經は完結す。(諸般若經一卷 Ts. 函 p. 183b-187a.)

梵語所傳・藏譯『轉法輪經』

この語を我は聞けり。一時に於て、佛世尊は婆羅奈斯の仙人住處鹿野苑に住し給ひ、かしこにて世尊は五群の比丘に告げたまへり。

(一)比丘等よ、我は未だ嘗て聞かざりし諸法に於て、是は苦聖諦なりとて、方法に従て念せしと
ゑ、眼生じ(Mig-b-Skyid-Pa) 智 (Ges-Pa) 明 (Rig-Pa) 覺 (Blo) 思惟 (Rtogs-Pa) は生ぜり (bSkyedSo, 發起せり)。

(二)比丘等よ、我は未だ嘗て聞かざりし諸法に於て、是は苦集なり、是は苦滅なり、是は苦滅行道なりとて、方法に従て念せしと
眼を生じ、智と、明と、覺と、思惟とは生ぜり。

(三)比丘等よ、我は未だ嘗て聞かざりし諸法に於て、この苦聖諦を我は明かに知りし故に、總てを知らざるべからずとて、方法に従て念せしとき、眼は生じ、智と、明と、覺と、思惟とは生ぜり。

(四)比丘等よ、我は未だ嘗て聞かざりし諸法に於て、この苦集聖諦を我は明かに知りしが故に、斷せざるべからずとて、方法に従て念せしとき、眼は生じ、智と、明と、覺と、思惟とは生ぜり。

(五)比丘等よ、我は未だ嘗て聞かざりし諸法に於て、この苦滅智聖諦を我は明かに知りし故に、現前に於て知らざるべからずとて、方法に従て念せしとき、眼は生じ、智と、明と、覺と、思惟とは生ぜり。

(六)比丘等よ、我は未だ嘗て聞かざりし諸法に於て、この苦滅行道聖諦を我は明かに知りしが故に、修習せざるべからずとて、方法に従て念せしとき、眼は生じ、智と、明と、覺と、思惟とは生ぜり。

(七)比丘等よ、我は未だ嘗て聞かざりし諸法の中に於て、この苦諦を我は明かに知りしが故に、全く知らざるべからずとて、方法に従て念せしとき、眼は生じ、智と、明と、覺と、思惟とは生ぜり。

(八)比丘等よ、我は未だ嘗て聞かざりし諸法に於て、この苦集聖諦を我は明かに知りしが故に、斷せざるべからずとて、方法に従て念せしとき、眼は生じ、智と、明と、覺と、思惟とは生ぜり。

(九)比丘等よ、我は未だ嘗て知らざりし諸法に於て、この苦滅智聖諦を我は明かに知りし故に、眼前に行せざるべからずとて、方法に従て念せしとき、眼は法じ、智と、明と、覺と、思惟とは生ぜり。

(十)比丘等よ、我は未だ嘗て聞かざりし諸法に於て、この苦滅行道聖諦を、我は明かに知りし故

に修習せざるべからずとて、方法に従て念せしとき、眼は生じ、智と、明と、思惟とは生ぜり。

(十一)比丘等よ、我は長き間この諸の四聖諦を今の如く三度誦し、十二相を轉せしかど、眼は生ぜず、智は(生じて)あらず、明は(生じて)あらず、覺は(生じて)あらず、思惟は生ぜざりき。その間、我は天と俱なる世間、魔と俱なる、梵と俱なる、比丘、婆羅門と俱なる、群生、天人と俱なる是(等)の中に於て、解脱と、決定出離とを有せず、眞に解脱し、顛倒を離る心を以て多く住するを得ざりき。

(十二)比丘等よ、我は無上正等菩提を明かに圓滿せる覺者なりと云へるを知らざりき。

(十三)比丘等よ、我はそれより此諸の四聖諦を今の如く、三度誦して十二相を轉せしに、眼は生じ、智と、明と、覺と、思惟とは生ぜり。かくて我は天と俱なる世間、魔と俱なる、梵と俱なる、比丘、婆羅門と俱なる、群生、天、人と俱なる是(等)の中に於て、解脱と、決定出離とを有し、眞に解脱し、顛倒を離れたる心を以て多く住するを得るに至れり。

(十四)比丘等よ、我はそれより無上正等菩提を明かに圓滿せる覺者なりと云へるを知れり。この法門を告げ給ひしとき、具壽憍陳如と、八萬の天とは、諸法に於て、法眼を生じて塵なく、垢を離れたり。

(十五)爾時、世尊は具壽憍陳如に告げ給ひき、憍陳如よ、汝は一切を知れりや否と。世尊よ、一

切を求めてありと。憍陳如よ、汝は一切を知れりや、一切を知れりやと。善逝よ、一切を求めてあり、一切を求めてありと。

具壽憍陳如は一切を知れり。この故に具壽憍陳如(Ānanda)と云へる名字を附せられたり。

(十六)具壽憍陳如は一切を知れりとして、地上の諸夜叉は聲を(揚げて)叫びたり。諸の同胞よ、世尊は婆羅奈斯に於ける仙人(住處)鹿野苑にて、三度誦し、十二相に於て法輪の法を具し、沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵の誰もさへ尙世間に於て、法と相應するものを轉せざりき。(然るに)今諸生を饒益し、諸生を安穩にし、世間を哀愍し、諸の天と人の義と、利と、安穢との爲めに轉ずるが故に、天衆を明かに増(益)し、阿修羅總て損減せしめ給へりと云へる音聲を叫びぬ。

(十七)この地上の諸夜叉の音聲を聞きて、虚空を翔ける諸夜叉と、四王天衆と、三十三天と、夜摩天と、兜率天と、他化自在天の諸天より、かの刹那と、瞬間と、かの須臾に於て、梵の世界に至るまで高聲を(揚げて)叫びたり。

(十八)梵衆の諸天も音聲を叫びて、諸の同胞よ、世尊は婆羅奈斯國に於ける仙人(住處)鹿野苑に於て、三度誦し、十二相に於て法輪の法を具し、若は沙門、若は婆羅門、若は魔、若は梵の誰もさへ尙世間に於て、法を相應するものを決して轉せざりき。(然るに今)諸生を饒益し、諸生を安穩に

し、世間を哀愍し、諸の天と人との義と利と安穩の爲めに轉するが故に、天衆をよく増(益)し、阿修羅を總て損滅せしめ給へりと云へる音聲を叫びたり。

(十九)世尊は婆羅奈斯に於ける仙人(住處)鹿野苑に於て、三度誦し、十二相に於て法輪の法を具して轉せしかば、是れが爲めに、この法門を「法の輪を轉ず」と云へる語門と名けられたり。

法輪の經は完結す。(甘珠爾部第二十八函、p. 283b—283a. 大正十四年三月七日譯)

梵語所傳・藏譯『阿含大空經』

印度語 — *Cinyata nāma mahāsūtra* |

西藏語 — *mDo-Chen-Po Ston-Pa-Nid Ces-Bya-Ba* |

日本語 — 空性と名けらるゝ大經

三寶に敬禮す。

我はこの語を聞けり。一時世尊は舍衛國の東園に於ける鹿(子)持母精舍に住し給へり。爾時長老阿難陀は日中後に嚙座より起ち、世尊の所に往詣し、世尊の御足に稽首して一方にあり。一方にあ

りて世尊に向ひ、長老阿難陀は是の如く問へり。或時貴とき世尊は諸釋迦(族)の中にて諸釋迦族の祇陀城と名けらるゝ所に住し給ひしとき、世尊はかく宣べたまへり。阿難陀よ、我は空性(Cūṇyatā, Stoṭi-Pāṇid)に由て再三住せりと告げ給ひぬ。吾はかの義を求めてあり。貴とき世尊が告げ給ひし云何なるものも、吾は善く聞き、善く持し、善く念じ、善く敬ひ、善く證すれど、そは外にはあらず、是れのみなるや。

(世尊は)告げたまへり。阿難陀よ、そはその如し。我が所説を汝は善く聞き、善く持し、善く念じ、善く敬ひ、善く證せば、そは外ならず、これのみなりなりと。そは云何に然るや。

阿難陀よ、その時より今も尙空性に由て再三住(行)してあればなり。阿難陀よ、そは譬ば、この鹿(子)持母精舎は(空なり)。象(以上原本二七五左、馬、牛、羊、鶏、豚、財、米、穀物、金は空(Cūṇyatā, Stoṭi-Pā)なり。僕、婢、勞者、賃金生活者、男、女、童男、童女もまた空なり。(然れど)又唯比丘衆、若はそれよりも或ものに能依(Dreṇ)するにより、尙空ならざるものは存在す。

阿難陀よ、是の如く、そは何處にても何物もなし。かるが故に空なりと云へるを如實に隨見す。されどそはかの餘(煩惱)あれば、そは存在すと云へるを如實に知るべきなり。

阿難陀よ、この空性に入ることは、如實にして不顛倒なり。阿難陀よ、この故に比丘は噫く我は空性に由りて再三住せざるべからずと欲するとき、阿難陀よ、かの比丘は村想と、人想とを念せら

れ、廟想か、若はそれよりも或ものを念すべきなり。そは是を思惟するに、想の種類は是の如く、村想と人想とはまた是れ空なり。されど是の如く唯廟想、若はそれよりも或ものに能依するに由て尙不定は存在すと思惟す。そは又村想と、人想とに能依する煩惱のあらゆる住處もなし。即ち是の如く唯廟想か、若はそれよりも或ものに能依する煩惱の住處は存す。

阿難陀よ、この故にそは何處にても何物もなきが故に、そは又空なりと云はるゝを如實に隨見す。そは餘煩惱のものもあればそれは存在すと云はるゝを如實に善く知るべきなり。阿難陀よ、この空性に入ることば應に如實に隨つて不顛倒なり。

復阿難陀よ、或比丘は噫、我は空性に由て再三住せざるべからずと思ふとき、阿難陀よ、彼比丘は人想と、廟想とを念すべからず。地想か、若は或ものを念すべし。そは是の如く、あらゆる地面の高低と、莖と、幹と、棘刺根と、石と、沙と、瓦礫と共に、羚羊と、野獸と、殘忍なるものと、蝸などを念すべからず。あらゆる地方は平等と、不平等もなし。指掌の如く、清淨なる叢林を有し、爽快なりと。是等の地方を斯く念すべし。譬はかの牡牛の皮を百本の釘を以て張付け、皺を延ばし、收縮なきが如く、一切の地面の高低と、莖と棘刺根と、石と沙と、瓦礫と共に、羚羊と野獸と蝸などを念すべからず。あらゆる地面は平等と、不平等もなし。指掌の如く、清淨なる叢林ありて爽快なりと。これらの地方を是の如く念すべし。そは是を思惟するに、この想の種類は、即ち人想

ど、廟想ごのみか、或はそれよりも或ものに能依するに由て、尙不定は存在すと思惟す。されど
は人想と、廟想ごに能依する一切の煩惱の住處もなし。そは是の如く、地想か、或はその中の或も
のに僅かに能依する煩惱の住處存在す。彌難陀よ、かるが故に、そは何處にても何物もなし。それ
ゆへ空なりと定めるを如實に見らるべし(以上原文二七五左)。されどそはかの餘(煩惱)のものあれば、
そは存在すと云へるを如實に隨見すべきなり。阿難陀よ、空性に入ることば如實に應に隨つて顛
倒なり。

復無難陀よ、噫、我は空性に由て再次住すべきなりと思ふとき、阿難陀よ、かの比丘は廟想と、
地想ごを念すへからず。無邊空處想 (Ākāśānantyīyātari, Nam-mKhañ mThaḥ-Yas Skye-mChed Du
hDu-Āes-Pa) を、無邊識處想 (Vijñānanantīyātānam, Rnam-Āes mThaḥ-Yas Skye-mChe-Du hDu-Āes-
Pa) を念すべからず。無所有處想 (Ākiñ Canyāyātānam, Ci-Yan-Med-Pahi Skye-mChed-Du hDu-
Āes-Pa) か、或はそれよりも或ものを念す (Manaskāra, Yid-La Bye) となり。そは是を思惟する
に、この想の種類は是の如し。廟想と、地想ごはまた空なり。是の如く無邊空處想のみか、或はそ
れより或ものに能依 (Bṛten) するに由て尙空ならざるもの存すと思惟す。(されど)廟想ご、地想ご
に能依する一切煩惱の住處もなし。そは是の如く、唯無邊空處の想か、或はそれよりも或ものに僅
かに能依する煩惱の住處あり。

阿難陀よ。かるが故にそは何處にても何物もなし。それゆへ空(Sūnyam)なりと云はれ、また如實に隨見せらるべし。されど若しそは餘の(煩惱)あれば、そは存すと云はるゝが故に、應に如實に隨見すべきなり。

阿難陀よ、この空性(Cintyati, Ston-Pa-Nid)に入ること、應に如實に隨順することにして、不顛倒なり。

阿難陀よ。或比丘は噫、我は空性に由て再三住せざるべからずと思ふとき、阿難陀よ、かの比丘は地想と、無邊空處の想とを念すべからず。無邊識處の想か、或はそれよりも或ものを念すべきなり。そは是を思惟するに(以下原本二七六左)、想の種類とは、即ち地想と、無邊空處想とはまた是れ空なり。是の如く、唯無邊識處想か、或はそれよりも能依するに由て尙空ならざるもの存すと思惟す。そは又地想と、無邊空處想とに能依する一切煩惱の住處もなし。そは是の如く、唯無邊空處の想か、或はそれよりも或ものに僅かに能依する煩惱の住處は存するなり。

阿難陀よ、かるが故にそは何處にても何物もなし。それゆへ空なりと云はれ、なほ如實に隨見すべし。若しそは餘(の煩惱)あれば、そは存在すと云はるを應に如實に隨知すべし。

阿難陀よ、この空性に入ること、應に如實に隨ふことにして、(そは)不顛倒なり。

復阿難陀よ。或比丘は噫、我は空性に再三住せざるべからずと思ふとき、阿難陀よ、かの比丘

は無邊空處想と、無邊識處想とを念すべからず。無所有處の想か、或はその中の或ものを念すべきなり。そは是を思惟するに、想の種類、即ち無邊空處想と、無邊識處想とは空なり。そは是の如く唯無所有處の想か、或はその中の或ものに能依するに由て、尙空ならざるもの存すと思惟す。(されど)無邊空處の想と、無邊識處の想とに能依する一切煩惱の住處はなし。そは是の如く、無邊空處の想と、無邊識處の想とはまた空なり。是の如く、無所有處の想か、或はその中の或ものに僅かに能依する煩惱の住處は存す。阿難陀よ、かるが故に、そは何處にも何もなし。それゆへに空なりと言はるゝを如實に隨見すべし。若しそは餘のものあれば、そは存すと言はるゝが故に、如實に隨見すべきなり。阿難陀よ、この空性に入ることば、如實に隨順することにして、不顛倒なり。復阿難陀よ。或比丘は噫、我は空性に由て再三住せざるべからず思ふとき、阿難陀よ、かの比丘は無邊識處想と、無所有處想とを念すべからず。無相界 (Alaksana-dhatu, mTshan-Ma-Med-Pahi dByams) か、或はそれよりも或ものを念すべきなり。そは是を思惟するに、想の種類は即ち、無邊識處想と、無所有處想とはまた空なり。是の如く、唯無相界か、若はそれよりも或ものに能依するに由て空ならざるもの存すと思惟す。そは無邊識處想と、無所有處想とに能依する一切煩惱もまたなし。そは即ち唯無相界か、若はそれよりも或ものに僅かに能依する煩惱の住處は存すなり。

阿難陀よ、かるが故に、そは何處にても何物もなし。それゆへ空なりと言へるを如實に隨見すべ

し、そはかの一切の餘のものも存すと云へるを如實に隨知すべきなり。

阿難陀よ、この空性に入ることば、應に如實に隨つて不顛倒なり。そは是を思惟するに、無相界もまた現かに有爲 (Samskṛta, ĪDus-Bayas) にして、心を以て現かに思惟 (bSams-Pa) せらるなり。

總てかの現かに有爲にして、心を以て現かに思惟せらるものは、(これ)現に歡ばれ、若は現に説明せられ、若は深く愛着せられ、或は深く愛着せられ、住せらるゝものなれば(そは)不合理なりと思惟す。それゆへ斯く知り、斯く見るが故に、欲漏より心を解脱し、(三)有漏と、無明漏とより心を解脱せしむなり。解脱に由て我は生盡き、淨行に依止し、所作は爲され、この(三)有より他(の)有を受くる)を知らずと云はれ、只解脱智を見るのみとなるべし。

そは是を思惟するに、この想の種類は即ち、欲漏と、(三)有漏と、無明漏とは亦空なり。そは是の如く、この命縁を作る六處身の方に能依するが故に、空ならざるものが存すと思ふべし。そは欲漏と、(三)有漏と、無明漏とに能依するところのかの所有の煩惱の住處もなし。是の如く、命縁を作れるかの六處身の方に僅かに能依する煩惱の住處は存するなり。

阿難陀よ、かるが故にそは何處に於ても何物もなし、それゆへ空なりと云へるを隨見し、命漏なくして現かに無爲なり。若しそれ餘(煩惱)あれば、そは存すと云へるを如實に隨つて善く知るべきなり。

阿難陀よ、是の如く、諸漏盡きて漏なく、現かに無爲解脱の云何なるものも、是れぞ空性(Śūnyatā, Stoī-Pa-Nīd)に入る無上なり。

阿難陀よ、過去の時に出現せしかの如來應供等正覺の諸佛世尊はまた是の如く、諸漏は盡きて漏なく、現かに無爲解脱の空性に入るべきこの無上性(Bhāva Med-Pa-Nīd)を身を以て眼前に爲して成住せり。

阿難陀よ、未來の時に出現せんとするかの如來應供等覺の諸佛世尊はまた是の如く、諸漏は盡きて漏なく、現かに無爲解脱の空性に入るべきこの無上性を身を以て現前に爲して成住せん。

阿難陀よ、今出現の時に於て、今如來應供正等覺者は是の如く、諸漏盡きて漏なく、現かに無爲解脱の空性に入るべき此無正性を身を以て現前に爲して成住す。

阿難陀よ、かるが故に是の如く諸漏は盡きて漏なく、現かに無爲解脱の空性に入るべきこの無上性を身を以て現前に行じ、成就して住せざるべからずと、斯く學ぶべきなり。阿難陀よ、汝は是の如く學ぶべし。

爾時長老阿難陀は、世尊の宣説を現かに稱讚し、隨喜し、世の足下に稽首し、世尊の眼前より退去せり。

空性と名けらる大經は完結す。

印度の律師勝友 (Ji-amitra) と、智鎧 (Pratīkarma) と、大校訂譯家(西藏人)ワンデ・エーシー・デー (Yande Ye-Ges-Sole) の共譯、併に刊行なり。(余の將來、甘珠爾部正法念經第三卷内 P. B.274—A.278.)

西藏所傳・阿含『大集經』

印度語 — Maha-Samaya-sūtra |

西藏語 — ḥDus-Pa Chen-Pahi-mDo |

日本語 — 大集の經

聖三寶に敬禮す。

(1) 是の語を我は聞けり、一時に於て、世尊は釋迦の國、迦比羅の根本の大林中に於て、大比丘衆五百と、また彼等の一切の諸阿羅漢と俱に住し給ひき。かの十(方)世界の諸神は直ちに來集せり。之れ世尊と諸比丘衆とを見んが爲めなり。

(2) 爾時、淨居(天)族の諸天の四部は斯く問ひぬ。此にまた世尊は釋迦の國、迦比羅の根本の大

林中に、大比丘衆五百あり、またかの一切の諸阿羅漢と俱に住し給ひぬ。かの十(方)世界の諸神は直に來集せり。之れ世尊の諸比丘衆を見んが爲めなり。(吾等)一切のものは、是の如く、かの世尊の所へ往詣し、世尊の所へ各々に偈を以て稱讚すべきなり。

(3)爾時、かの諸天は是の如く、力士が屈したる臂を伸ばして、伸ばして屈するや否、淨居天の諸天は没して世尊の所に現はれぬ。爾時かの諸天は世尊に敬禮し、一方に座せり。座しまたかの諸天は世尊の所へ此の諸偈を以て曰く、

「大集の林に、

諸天神の群は集りて

この法の爲めに我は來り、

無能勝の集衆を見んとす。」

爾時他の諸天は世尊の所へ此偈を以て曰く(原文二百七十五右)、

「比丘よ、諸心を制せよ、

自心を正直になせ、

調禦者に由て正直に持せしむ、是の如く賢者は根を護るなり。」

爾時、他の諸天は世尊の所へこの偈を以て曰く、

「家の飾りを脱して、

自由にして心を解脱し、

清淨にしてかの無垢處に行く、有眼の象を禦するが如し。」

爾時、他の諸天は世尊の所へこの偈を以て曰く、

「誰も佛を歸依せば、

彼は惡趣へ行かず、

人の身を離るゝとき、

天の身は全く完成せらるべし。」

爾時、世尊は諸比丘を呼び給ふや否、諸比丘よ、十方世界の諸天は集れり、そは如來と比丘衆とを見んが爲めなり。

比丘よ、殆ど彼の諸(佛)となれる過去の諸の世尊正等覺者は、(今)この世尊の如く成れり。是の如く諸天は集れり、是の如く我も亦かの諸比丘の如く集まれり。是の如く、我もまた此説をかく説きぬ。

諸比丘よ、諸天の群の名を稱讚し、諸比丘よ、よく明かにせしむと云へる天の群と、諸比丘よ、天の群を教へしむと云へるなり。是を聞きて善く心に持し、眞實に説くべきなり。是の如く、尊ぶとき世尊に、かの諸比丘は各々に願へり。世尊はかくの告げ給ひ、各々の偈を以て説き給へり。

(5)「何處にても根本を見るとき、何處の山の窟にも住むべし、

そこに入定し、

根本の地に行きし無畏の如く、

毛髮さへ尙動かず、

心は清淨にして白し。

水河は能く澄みて池の如く、

五百(人)によりて能く知らる。」

「迦毘羅城の林の諸住處を見るに、(一)句缺」

かく比丘を教ゆべく呼び、

佛の教を歡ぶ諸聲聞、

諸天の群の來れるを、

諸比丘は彼を知れり。

身は骨とならず、

佛の教を聞くによるなり、

かの諸(人)は智慧を現はし、

諸の非人を見るに至る。」

(6)「或ものは百(神)を見るべし、

千と七十(神)とを見るなり、

百(神)と一千(神)と、

諸の非人とを見るべし。

或るものは無邊を見るに、

諸方に遍滿するを見ん、

かの諸に由て了解と、

有眼とを能く分別す。

この故に師(世尊)は呼び給へり、教法を歡ぶ聲聞は、

諸の天神の集れるを、

諸比丘はそれを知れり。」

(7)「或ものは自ら言へり、

次第の如く聞くに由り、

七千の諸の夜叉は、

迦毘羅地に住し、

神通を有し、光りあり、

色に光輝あり、名聲あり、

法話の爲めに此に來り、

寂靜に由て比丘の林に住す。」

「雪山の六十のものは雪山よりす、

その夜叉は種々の色を有し、

神通を有し、光りあり、

色に光輝あり、

法話の爲めに此に來り、

寂靜に由て比丘の林に住す。」

(8)「種々の友人は五百なり、

夜叉は種々の色身を有し、

神通を有し、光を有し、

光輝を有し、

法話の爲めに此に來り、

寂靜に由て比丘の林に住す。」

「王舍城の夜叉、

金毘羅(Kumbhira)は、

Vepulla(Nos-Yons-Pi)に住し、

力あるもの十萬あり、

諸夜叉の眷屬を以て變ず、

王舍城の夜叉金毘羅は、

寂靜に由て比丘の林に住す。」

(9) (a)「東方の王は、

名を護國輪王といふ、

諸の乾闥婆の王にして、

大名聲を有する大王なり。

彼の子は多く、

名は同一に聞かれて、

因陀羅といひて大力あり、

神通を有し、光りあり、

色に光輝あり、

法話の爲めに來り、

寂靜に由て比丘の林に住す。」

(d)「南方の王は、

名を Virudhaka(hPhags-Skyes-Po) とす。

諸の惡鬼の主にして、

大名譽ある大王なり、

彼の子は多く、

名は同一に聞かれて、

色に光輝を有し、

法を話さんが爲めに此に來り、

寂靜に由て比丘の林に住す。」

(c)「西方の王は、

名を Virupakkha とす。

諸龍の主にして、

大名譽ある大王なり、

彼の子は多く、

名を同一に聞かれ、

色に光輝を有し、
寂靜に由て比丘の林に住す。」

法を話さんが爲めに此に來り、

(d)「北方の王は、

鳩鞞羅 (Kuvera) といふ、

諸の夜叉の王にして、

大名譽ある大王なり、

彼の子は多くして、

名は同一に聞かれ、

因陀羅と名けて大力あり、

神通を有し、光りあり、

色に光輝を有し、

法を話さんが爲めに此に來り、

寂靜に由て比丘の林に住す。」

(c)「東方は Dhataratha にして、

南方は毘盧陀迦王なり、

西方は毘盧波迦王にして、

北方は鳩鞞羅なり。

かの諸の四大王は、

四方の總ても護るなり、

威神熾盛を轉じ、

迦毘羅城の四方の林に住す。」

(10) 「彼等は奇術の遊戲を考へ、

摩夜マヤの Skufenya 々、

諸の待者は虚空に住じ、
Viryaccha 々 Viryato を生み、

Candana Kamavara 々、

美々眞據々、

有情の無上士となり、

天より生じたる調禦者、

種々の乾闥婆の群は、

人王の毘濕努と、

かの Pañcasikha の如く、

Suriyavaccasā とは月の如く輝く。

彼と他の諸王とは、

乾闥婆王と共に、

祝法の爲めに此に來り、

寂靜に由て比丘の林に住す。」

(11) 爾時、また虚空の龍王は、

毘舍到城に來り、

Lavarta の最上(者)は、

親戚と俱に、

Yamuna 國を守り、

龍の(一字不明)と名譽を有し、

地を守護する諸象なり、

彼は又森林に住す。」

「若し龍王は速かに擢まんどし、

天鳥の清かな名は、

虚空より來りて此の林に住す、

彼の名は好葉と名く、

無畏の恵みに由て龍王は
相互に格闘せず、

空を翔ひ忍ぶを見るに由り、
龍と鳥とは佛に歸依す。」

(12) 金剛手の王と、

かの住み家は、

阿修羅とは海中に住して兄弟なり、
威徳を有し、名譽を有し、

Kulakajja は畏薬を有し、

諸の阿修羅は忿怒す。」

西藏所傳・阿含大集經 (完)

(『諸般若經』一巻、T. s. p. 277a-277.) (大正十四年二月廿八日譯)

註 ① 巴利語 Kutendu.

② 同 Vetendu.

③ 同 Vitu.